# 集団の中での役割の自覚を高める道徳教育の工夫
## ― 体験活動と関連させた「集団かかわりプログラム」の開発を通して ―

竹原市立竹原西小学校　大橋　美代子

**研究の要約**

本研究は，集団の中での役割の自覚を高める道徳教育の工夫について，体験活動と関連させた「集団かかわりプログラム」の開発を通して考察したものである。文献研究から，様々な他者や集団と直接かかわらせる体験活動を意図的に仕組み，道徳の時間との関連を図ることが，「集団の中での役割の自覚」を高めるのに有効であることが分かった。そこで，低学年・同学年という，対象の異なる体験活動と道徳の時間を関連させた「集団かかわりプログラム」を開発し，道徳の時間の展開後段において，体験活動の様子を補助資料として取り入れることで，道徳的価値について感じたり考えたりしたことを補充，深化，統合し，「集団の中での役割の自覚」を高める工夫を行った。その結果，児童の自己有用感が高まり，道徳的価値の自覚を深めることができた。これらのことから，「集団かかわりプログラム」は，集団の中での役割の自覚を高めるのに有効であるといえる。

**キーワード：役割の自覚　体験活動　集団かかわりプログラム**

## Ⅰ　研究の目的

小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年，以下「解説」とする。）「第３指導計画の作成と内容の取扱い」において，高学年の指導内容の重点化を図るものとして，集団における役割と責任を果たすことが示されている。また，平成25年12月に出された「道徳教育の充実に関する懇談会」による「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」の中では，道徳教育の改善内容として，子供たち自身に社会に参画し，役割を担っていくべき立場を意識させ，社会を構成する一員としての主体的な生き方に関わる教育を推進していくことの必要性について報告された。

所属校では，平成25年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査において，「人の役に立つ人間になりたい」と回答した児童が98％（全国平均93.7％）と高いが，集団の中で自らの役割を意識して行動できる児童は60％と低い状況にある。このことから，「人の役に立ちたい」という思いはあるが，児童自らの役割の自覚が高まっておらず，行動化に至っていない児童が比較的多いことが分かった。

これらの課題を踏まえ，他者や集団と直接かかわらせる体験活動と道徳の時間を組み合わせたプログラム（以下「集団かかわりプログラム」とする。）の開発を行う。

本研究は，「集団かかわりプログラム」を通して，体験活動において道徳的価値について感じたり考えたりしたことを道徳の時間で補充，深化，統合し，「集団の中での役割の自覚」を高めることを目的とする。

## Ⅱ　研究の基本的な考え方

### １　集団の中での役割の自覚を高める道徳教育について

#### (1) 集団の中での役割の自覚とは

「解説」には，第５学年及び第６学年の内容「４主として集団や社会とのかかわりに関すること」の（３）に，集団と個のかかわりの基本について示されており，「身近な集団の中での自分の役割と責任」に関する内容項目が設定されている。その中で，「集団と個の関係は，集団の中で一人一人が尊重され生かされながら，主体的な参加と協力の下に集団全体が成り立ち，その向上が図られるものでなければならない。」[1)]と示されており，集団に属する一人一人が，集団の活動に積極的に参加し，集団の意義に気付き，その中での自分の位置や役割を自覚することの重要性について述べられている。

堺正之（平成24年）は，「社会参画への意欲や態度を形成する教育の視点」の中で，社会や集団が人々の支え合い，助け合い（依存関係）で成り立っていることを認識し，高学年の児童が，社会の中の一員として何をするべきかを考え，課題意識をもつことの必要性について述べている。

これらのことから，本研究における，集団の中での役割の自覚とは，「児童一人一人が，集団の一員として，所属する集団全体の向上に向け，自分のやるべき役割について知ること」とする。

### (2) 集団の中での役割の自覚を高めるには

「解説」の４－（３）「集団における役割の自覚」の項目（高学年）には，「身近な集団において，自分の立場や全体の動きを自覚できる活動に主体的，積極的に参加できるようにしていく必要がある。それらを通して自分の役割と責任を果たすとともに，成員相互のかかわりの大切さや，協力して目標を達成することのよさに気付くことができるよう指導することが大切である。」[2)]と述べている。

また「２　体験活動を生かすなどの指導の充実」の中で，「高学年になると，集団宿泊活動等が行われ，その中で協力する体験，（略）などが多様に行われる。そのような体験における活動の深まりを，道徳の時間での資料に基づく話合いに意図的に生かしたりする。」[3)]と，道徳の時間における体験活動を生かした，創意工夫ある指導について述べている。

これらのことから，本研究では，体験活動との関連を図り，道徳の時間を要とした道徳教育の工夫を行うことで，「集団の中での役割の自覚」を高めることができると考える。

## ２　体験活動と関連させた「集団かかわりプログラム」について

### (1) 本研究における体験活動とは

広島県教育委員会は，豊かな心の育成に向け，「体験活動の充実」を掲げており，その中で長期の集団宿泊活動を推進している。学習の流れにおいては，児童の道徳性の向上やコミュニケーション能力など人間関係を形成する力の育成につながる体験活動にするため，日常と異なる宿泊体験はもとより，調べる，準備する，振り返る，まとめる，発表し合う等，事前事後の指導の充実を図る必要性を示している。

また，文部科学省は「体験活動事例集」（平成15年）「２　体験活動の意義」の中で，子供たちは現実の社会に直面し人とかかわることで，大きな感動，葛藤，挫折などの心の体験をし，その体験を通して自らの人間性や価値の選択能力を育むことができると述べている。児童が様々な人と直接かかわる体験は心の体験となり，豊かな人間性や価値観を形成することを示している。

さらに，国立教育政策研究所生徒指導研究センター（平成23年）は，「子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』」の中で，他者の存在を前提として自分の存在価値を感じること，誰かの役に立てたという成就感や誰かから必要とされている満足感のことを「自己有用感」と呼び，異年齢の交流活動の中で，年長者自らが「自分の役割を自覚して行動したことが年少者の役に立った」と感じた時，「かかわり合う喜び」を感じ，自己有用感を獲得することができると述べている。

これらのことから，本研究での体験活動を異学年や同学年等，様々な他者や集団と直接かかわらせる，事前事後学習を含めた体験活動と捉え，その中で自己有用感を高める。そして，それを原動力としながら「集団の中での役割の自覚」を高めていくこととする。

### (2) 道徳の時間と体験活動の関連

藤永芳純（2009）は，「道徳の時間が，体験的な学習の時間ではなく，じっくりと道徳的価値と向きあい，価値を共感的に受け取り把握する学習時間である。」[4)]と述べている。

また，「解説」では，道徳の時間について，児童は学校の諸活動の中で，多様な道徳的価値について感じたり考えたりしているが，道徳的価値の意味などを必ずしもじっくり考え，深めることができているとは限らないため，道徳的価値の意味や自分とのかかわりについて一層考えを深化させる役割を担っていると示されている。

さらに押谷由夫（2013）は，道徳の時間で育成する道徳的実践力について，道徳的実践を支える内面的な力である道徳的実践力は，将来にも力を発揮できるようなものであるため，さらに実践と響き合わせる必要があると述べている。

これらのことから，道徳の時間と体験活動を響き合わせる指導を行う。そして，体験活動において道徳的価値について感じたり考えたりしたことを，道徳の時間の中で補充，深化，統合することで，「集団の中での役割の自覚」を高めることができるようにする。

### (3) 「集団かかわりプログラム」について

本研究では「集団の中での役割の自覚」を高めるため，上記に示したように道徳の時間と体験活動を

関連させた「集団かかわりプログラム」を開発する。

そこで本プログラムの概要について，図１の構想図で表し，その工夫点を以下の２点で述べる。

**ア　意図的に設定した対象の異なる体験活動**

石原利樹（2003）は，年下の児童生徒と直接かかわらせる交流活動が，年上である児童生徒の自己有用感を高めるのに有効であることを明らかにし，年下の児童に接している同学年の児童の行動から，その姿をモデルとしてとらえる年上の児童の姿も明らかになった。これらのことから，年下の児童との交流活動は，年下の児童だけでなく，同学年同士でのモデル形成にも効果があると分かった。

また，成田國英（1996）は，同年齢集団では，集団を構成する者同士は，能力や体力，興味・関心などが同じで，互いにライバルとしての関係にあるが，異年齢集団では，成員の能力や経験の違いを生かすことができ，実際の活動において対等な立場で競い合う意識は薄く，上級生は下級生に対して，思いやりの気持ちをもち，温かい雰囲気で活動を行うことができると，異年齢集団での特質を述べている。

さらに鶴野尚美（2007）は，同学年同士の活動の前に年下の学年との活動を組み入れたプログラムの効果を明らかにした。年下の学年との活動を通して，他者の意見を聞いたり，複数の考えをまとめたりすることができるようになり，それが自信となって，「学級の仲間から必要とされている」という思いにつながり，同学年での活動の中で「人の役に立とう」とする意欲や態度がさらに高められることを明らかにした。

これらのことから，「集団かかわりプログラム」では，図１中の右側に示したように，プログラムの目指すものを「集団における役割の自覚の高まり」と設定し，まず低学年との体験活動を意図的に仕組み，年下の児童に思いやりの気持ちをもって教えたり，手伝ったりする体験活動を行う。この中で「自分は人の役に立つことができる」という自己有用感を高め，それを原動力としながら「集団の中での役割の自覚」を高めていく。そして，その後，集団宿泊活動に向け，同学年で，全員が楽しめる活動内容について話し合ったり，具体物を準備したりする体験活動を意図的に仕組む。その中で低学年との活動で得た経験を生かしながら，集団の中で自分が何をすべきか考えさせ，役割を果たそうとする意欲を高めていく。

このように本プログラムでは，図１中の右側に示したように，同学年での体験活動の前に低学年との

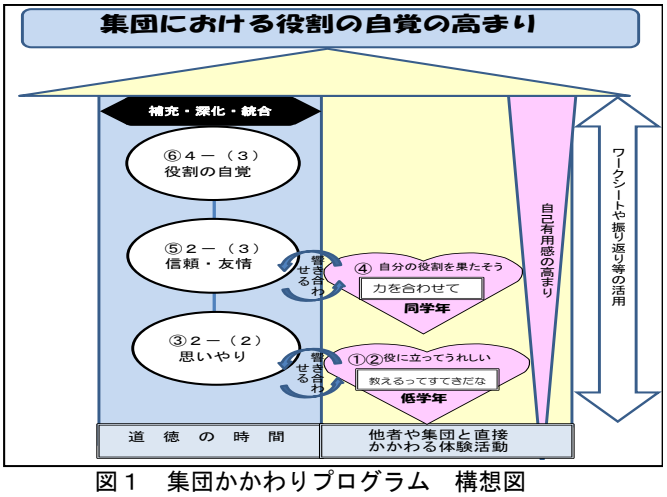


図１　集団かかわりプログラム　構想図

体験活動を仕組むことで，自己有用感を高め，児童自らが，集団全体の向上に向け，主体的に役割を果たそうとする自覚を高めていく。

**イ　道徳的価値の自覚を深める道徳の時間**

「解説」の「３　年間指導計画作成上の創意工夫と留意点」では，「内容によっては複数の時間の関連を図った指導の工夫などを計画的に位置付けて行うことも考えられる」[5]と示されている。

また，大分市教育委員会（平成20年）が作成した「魅力ある道徳授業の展開」の「４の視点と他の視点との関連」の中で，「社会集団における成員相互のかかわりを考えると，他の人とのかかわりに関することに挙げられている内容が基盤となり，集団や社会とのかかわりに関する内容に発展する」[6]と，２の視点が４の視点の基盤であることを明らかにした。

これらのことから，図１中の左側に示したように，要となる道徳の時間では，役割の自覚を高めるため，２－(２)思いやり，２－(３)信頼・友情を基盤として，４－(３)役割の自覚の授業を構成する。授業の具体的な流れについては次頁表１に示す。

さらに，小寺正一（2009）は，道徳の時間の展開後段では，資料で学習した内容や道徳的価値を自分自身の中に受け入れ，自分の姿や考え方を見つめ高め，自分の生活に戻す段階であると定義した。また，補助資料を使うことで，中心資料で学習した価値が，他の場面や状況でも幅広く使えることが理解できるなら，有効であると述べている。

このことから，図１中の両方向の矢印の中にあるように，体験活動での画像や映像，児童の振り返りなどを道徳の時間の展開後段に補助資料として取り入れ，道徳の時間と体験活動を響き合わせながら，道徳的価値を補充，深化，統合することとする。具体的には，資料を用いて道徳的価値について学習し

表１　集団かかわりプログラムの流れ

| 学習内容と主題名 | ねらい | 児童の意識の流れ |
|---|---|---|
| **第１時・第２時　低学年との体験活動**<br>学級活動（２）ウ望ましい人間関係の形成<br>題材「温かい人間関係を育む」<br>テーマ「教えるってすてきだな」 | ２年生とのボール遊びを通して，年下の児童の気持ちを考えながら行動したり，同学年同士で協力し合ったりすることで，温かい人間関係をつくろうとする態度を育てる。 | ・相手の立場に立って考えることが大切だ。<br>・２年生さんの役に立てて嬉しい。<br>・○○さんの姿は立派だった。<br>・相手が誰でも思いやる気持ちは同じだな。<br>・自分から声をかけることが必要だ。 |
| **第３時　道徳の時間**　　思いやりの心で<br>２－（２）　思いやり・親切<br>資料「くずれ落ちただんボール箱」<br>出典【東京書籍】 | おばあさんやお店の人にお礼を言われた時の「わたし」の気持ちを考えることを通して，相手の立場に立って行動することの大切さに気付き，思いやりの気持ちをもって行動しようとする道徳的態度を養う。 | |
| **第４時　同学年での体験活動**<br>学級活動（２）ウ望ましい人間関係の形成<br>題材「温かい人間関係を育む」<br>テーマ「力を合わせて」 | 「みんなが楽しめる集団宿泊活動にしよう」というねらいのもと，話合いに進んで参加し，自分の考えを伝えたり，友達の考えを受け止めたりしながら，みんなで協力して活動を進めようと意欲を高める。 | ・○○さんは困っている時に手伝ってくれた。助け合うことは大切だ。<br>・みんなで何かをするには，お互い協力し合うことが必要だ。<br>・けんかをしないで，みんなで仲良く話し合うことが成功につながるな。<br>・私は▲▲の仕事をしっかりやろう。 |
| **第５時　道徳の時間**　　本当の友情とは<br>２－（３）　信頼・友情<br>資料「長なわ大会」　出典【日本文教出版】 | 川村君から練習に参加しない理由を聞いた時の「ぼく」の気持ちの変化を考えることを通して，友達同士で信頼し合い協力していこうとする道徳的態度を養う。 | |
| **第６時　道徳の時間**　　一人一人が主役<br>４－（３）役割の自覚<br>資料「森の絵」　出典【学研】 | 自分がやりたかった女王の役を譲り，やる気を失ったえり子が，みんなのために絵を描こうと決めるに至った気持ちの変化を考えることを通して，集団の一員として自分の役割を自覚し，集団全体のことを考えて行動しようとする道徳的態度を養う。 | ・みんなのために進んで動くことは大切だ。<br>・あの時，○○君は▲▲をしていた。自分の役割に気付いて，最後までやりきることはすごいことだ。<br>・自分から仕事を見つけて動こう。 |

た後，展開後段において，自分たちの体験活動の様子を視覚的に提示し，想起させることで，自分のこととして道徳的価値と向き合わせ，考えさせる。その際，体験活動でのワークシートや振り返り等を活用して自分自身を振り返らせる場面を設定する。

また，「解説」では，道徳教育の要である，道徳の時間で深めていくべき道徳的価値の自覚について

①道徳的価値を理解する
②道徳的価値を自分とのかかわりで捉える
③自分なりに道徳的価値を発展させる

の三つの事柄を押さえておくことが考えられ，道徳的諸価値を自分のこととして捉え，さらに，自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われることが明記されている。

このことから，本研究では，上記の三つの事柄を意識し，特に「集団の中での役割」における道徳的価値を自分なりに発展させることで，その実現に向けての思いや願いをもたせ，道徳的価値の自覚を深めていく。

## Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

### １　研究の仮説

道徳の時間と体験活動を関連させる「集団かかわりプログラム」を実践すれば，自己有用感を高めることができ，「集団の中での役割」における道徳的価値の自覚を深め，「集団の中での役割の自覚」を高めることができるであろう。

### ２　検証の視点と方法

検証の視点と方法については表２に示す。

表２　検証の視点と方法

| 検証の視点 | 方法 |
|---|---|
| 体験活動を設定したことは，自己有用感を高めるのに有効だったか。 | 体験活動ワークシート<br>体験活動事前事後アンケート |
| 体験活動との関連を図り，道徳の時間を工夫したことは，道徳的価値の自覚を深めるのに有効だったか。 | 授業記録<br>道徳の時間ワークシート<br>道徳の時間アンケート |
| 「集団かかわりプログラム」は，「集団の中での役割の自覚」を高めるのに有効だったか。 | 道徳事前事後アンケート<br>道徳の時間アンケート<br>体験活動アンケート<br>体験活動ワークシート<br>活動・授業記録<br>個の変容（観察法） |

### ３　検証のためのアンケート

本研究では，埼玉県立総合教育センター（平成13年）が報告した「社会性を構成する９要因と児童生徒の社会性チェックリスト」，石原（2003）の実施したアンケート項目を基に，集団における役割の自覚に関連するアンケート（４段階評定尺度法）を作成し，実態把握及び「集団かかわりプログラム」の有効性について検証する。

## Ⅳ　研究授業について

### １　研究授業の内容

○　期間　平成26年６月24日～平成26年７月４日
○　対象　所属校第５学年１組（23人）

### ２　授業の概要

研究授業として行った三つの道徳の時間の概要を次頁表３に示す。

## Ⅴ　研究授業の分析と考察

### １　体験活動を設定したことは，自己有用感を高めるのに有効だったか

第１時の２年生との活動内容等の話合いでは，「２年生に投げる力を付けられるように」「楽しみながら活動できるように」という意見を基に，児童一人一人が「２年生のために自分の役割を果たそう」という思いをもって取り組む姿が見られた。

第２時では，第１時の話合いを基に，直接２年生とかかわる体験活動を行った。児童の様子からは，緊張気味の２年生を優しくリードしながら教える姿が多く見られ，活動終盤では，２年生と笑顔で話したり，握手をして別れたりする和やかな雰囲気に包まれていた。体験活動後の児童の振り返りの記述内容をまとめると表４のようになった。

表４　低学年との体験活動後の児童の振り返りの記述内容

| 主な内容 | 割合 |
|---|---|
| ２年生に力（投げる・取る・ルール）がつくように教えることができた。 | 48% |
| ２年生に楽しんでもらえてうれしかった。 | 16% |
| 下の学年には優しく教えるようにしたい。 | ９％ |
| またこのような活動をやりたい。（他学年を含む） | ９％ |
| 今日のやったことを生かしていきたい。 | ９％ |
| 教え方は難しいなと感じた。 | ９％ |

この記述内容から，48%の児童が自分の役割を意識して活動できたことに満足していることが分かった。また，16%の児童が２年生の役に立てた喜びを感じ，さらに27%の児童が，今後の活動へ向けての意欲を高め，低学年との活動で学んだことを生かそうとしていることが分かった。

その後，第４時の同学年での体験活動では，集団宿泊活動のオリエンテーリングの話合いを行った。体験活動後の児童の振り返りの記述内容をまとめたところ，表５のようになった。一人に複数の感想が含まれていたので，38種類の感想が得られた。

表５から，52%の児童が，自分の役割を果たすことの大切さに係る記述をしていたことが分かった。また，65%の児童が「相手のことを考えて譲り合ったり，みんなのことを考えたりしながら話し合うことができた。」という記述をしていた。これらの結果や話合いの様子から，学んだことを生かし，グループ全体のことを考えながら，自分の役割を果たそうとすることができたと推測できる。

表５　同学年での体験活動後の児童の振り返りの記述内容

| 主な内容 | 割合 |
|---|---|
| 相手のことを考えて譲り合ったり，みんなのことを考えたりしながら話し合うことができた。 | 65% |
| 自分の役割をしっかり果たしたい。 | 52% |
| みんなで楽しみながらやりたい。 | 21% |
| みんなで協力しながらゴールをめざしたい。 | 17% |
| 自分の役割をやることでみんなが楽しめると思う。 | ４％ |
| ２年生の体験活動と同じように同学年の話合いも上手くできた。 | ４％ |

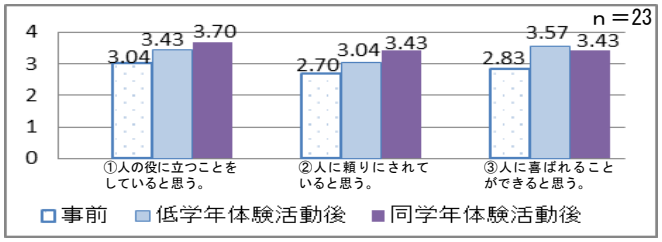


図２　体験活動の前後における自己有用感の評定平均値

また，事前，低学年との体験活動後，同学年での体験活動後の３回アンケートを実施し，それぞれの評定平均値を比較したところ，図２の結果になった。

表３　道徳の時間の概要

| | 第３時 道徳の時間（６月27日） | 第５時 道徳の時間（７月２日） | 第６時 道徳の時間（７月４日） |
|---|---|---|---|
| 主題名 | 思いやりの心で　２－(２)思いやり・親切 | 本当の友情とは２－(３)信頼・友情 | 一人一人が主役　４－(３)役割の自覚 |
| ねらい | おばあさんやお店の人にお礼を言われた時の「わたし」の気持ちを考えることを通して，相手の立場に立って行動することの大切さに気付き，思いやりの気持ちをもって行動しようとする道徳的態度を養う。 | 川村君から練習に参加しない理由を直接聞いた時の「ぼく」の気持ちの変化を考えることを通して，友達同士で信頼し合い協力していこうとする道徳的態度を養う。 | 自分がやりたかった女王の役ができなくなり，やる気を失ったえり子が，みんなのために絵を描こうと決めるに至った気持ちの変化を考えることを通して，集団の一員として自分の役割を自覚し，集団全体のことを考えて行動しようとする道徳的態度を養う。 |
| 資料名 | 「くずれ落ちただんボール箱」【東京書籍】 | 「長なわ大会」【日本文教出版】 | 「森の絵」【学研】 |
| 主な学習の流れ<br>主な発問（○）<br>中心発問（◎）<br>**太字（体験活動を補助資料とし使用）** | １　親切にしてもらって嬉しかったことを交流し合う。<br>２　資料を読んで話し合う。<br>○段ボール箱のかた付けを手伝った「わたし」の気持ちを考えよう。<br>○店の人に怒られた「わたし」は，どんな気持ちだったでしょう。<br>◎おばあさんやお店の人からのお礼を聞いた時の「わたし」の気持ちは，どのように変わったでしょう。<br>**３　体験活動の画像を見て，相手の気持ちを考えて行動して良かったと感じたことを話し合う。** | １　みんなで協力し合った経験を話し合う。<br>２　資料を読んで話し合う。<br>○ぼくは，どんな気持ちから川村君にきつく言ってしまったのだろう。<br>○川村君の話を聞いて，ぼくの気持ちはどのように変わったのだろう。<br>◎笑顔の川村君にＶサインを送ったぼくは，どんな気持ちだろう。<br>**３　体験活動の画像を見て，友達と協力し合って良かったと感じたことを話し合う。** | １　学級活動の様子を振り返る。<br>２　資料を読んで話し合う。<br>○なぜ，えり子は絵筆に力が入らなかったのでしょう。<br>○文男の言葉を聞いたえり子はどんな気持ちだったでしょう。<br>◎どんな気持ちでえり子はポスターカラーを皿の上でとき始めたでしょう。<br>**３　常時活動の画像を見て，自分の役割を自覚し，集団全体のために主体的に役割を果たすことの大切さについて話し合う。** |

まず，低学年，同学年における体験活動後の評定平均値を比較すると，同学年での体験活動後は，①②の項目において数値が上昇し，③の項目においては，数値がほぼ維持されていることが分かった。この結果より，低学年との体験活動で高まった「自分の役割を自覚して行動した。」「２年生の役に立った。」という自己有用感が，「自分は人の役に立っている。」「人に頼りにされている。」という思いや自信につながり，同学年での体験活動への意欲を高めたものと考える。

さらに，体験活動の事前と同学年での体験活動後における評定平均値を比較したところ，事前に比べ，体験活動後の評定平均値が３項目とも0.6ポイント以上上昇し，この結果を $t$ 検定にかけたところ，有意に上昇したことが分かった。

これらのことから，道徳の時間と体験活動を関連付けたことは，自己有用感を高める上で効果があったといえる。

## ２　体験活動との関連を図り，道徳の時間を工夫したことは，道徳的価値の自覚を深めるのに有効だったか

具体的な児童の様子をそれぞれの道徳の時間の授業実践を基に検証する。

### (1) 道徳の時間の授業実践より

#### ア　第３時の授業実践

展開後段では，資料の中での「相手のことを考えた行動」と，実際に自分たちが低学年のために教える活動を行った際の「自分のことではなく，２年生のためになる活動」が，どちらも「相手のことを考えた思いやり」であることに気付かせた。

映像では，２年生の肩にそっと手を差し伸べながら行動する姿，２年生の目線に合わせて腰を屈めて話す姿等を見せた。映像や画像を見ながら，「私も手を持ってあげながら，どこを見たらよいか教えたよ。」等，実際の活動を振り返りながらその時の様子を話し始めた。

**第２時　２年生との活動後**
２年生のために教えて，分かってくれました。これからも大休けいや昼休けいにドッジボールをやってほしいです。

**第３時　道徳の時間後**
２年生の交流の活動と，道徳のお話の「思いやり」は，場所や出来事はちがうけど，同じやさしさをしていたのでびっくりしました。

図３　児童の振り返りの記述内容

授業後の振り返りでは，図３のように，体験活動と資料の道徳的価値を響き合わせ，自分のこととして考えている記述が見られた。このことから，道徳的価値の理解をより深め，自分とのかかわりにおいて，道徳的価値を捉えていることが分かった。

#### イ　第５時の授業実践

展開後段では，同学年での体験活動の話合いの画像を使って，活動と資料内容や道徳的価値をつないだ。本時は，「相手のことを考え，協力し合うことが本当の友情」という道徳的価値について考えていったが，図４の授業記録からも分かるように，資料内容と展開後段の体験活動を結び付けることができず，自分のこととして考えさせることが十分できなかった。

T: 話合いの振り返りを読んでください。
C: 「今日はスムーズに話合いが進みました。集団宿泊活動が楽しみです。」と書きました。
T: このグループはなぜスムーズに進んだのかな。
C: 相手のことを考えているから。
（略）
T: 今日のお話とこの体験活動，何がつながっていますか。
C: ・・・・・・（なかなか手が挙がらない）
T: 何か同じところはないかな。重なるところは。
C: 絆。
C: 友情
C: 自分のことだけではなく，相手のことを考えている。

図４　授業の中での授業者と児童のやり取りの一部

これは，低学年との体験活動が「２年生に教える」という直接かかわり合う活動だった反面，同学年での体験活動は，集団宿泊活動に向けての話合いが中心の活動であったため，資料の内容と体験活動がつながりにくく，道徳的価値を自分とのかかわりにおいて捉えることが難しかったことが原因と考える。

#### ウ　第６時の授業実践

本時は，本プログラムの最終にあたる時間でもあるため，集団の一員として自分の役割を自覚し，集団全体のことを考えて行動しようとする道徳的態度や意欲を養うことをねらいとした。

展開後段では，登場人物と同じように役割を果たそうとした経験について問うたところ，「野外活動のオリエンテーリングの話合い。」「２年生との体験活動でも感じた。」と，二つの体験活動が児童から出た。そこで，資料内容と体験活動がつながるよう，今までの体験活動の様子を電子黒板に映し，その時の様子を想起させた。そして，児童が振り返りで書いた「役割を最後までやりきることは，みんなを楽しくする」という記述内容について考えさせ，「自分の役割を果たすことは，自分だけでなく，みんな，全員，集団全体が良くなることにつながる」とまとめた。

さらに，道徳的価値の自覚を発展的に捉えさせるため，５年生としての役割を問うたところ，「係の

仕事」「日直の仕事」「給食当番」「クラブ」「委員会」「縦割りのそうじ」「登校班」等の意見が出た。児童は学級や学年から，学校全体での自分の役割に考えを広げることができ，「集団の中での役割の自覚」に係る道徳的価値について発展的に考えることができた。

### (2) 道徳の時間を通して

児童の振り返りの記述を基に，「理解する」「自分とのかかわりで捉える」「発展させる」という道徳的価値の自覚の三つの事柄で内容を分類したところ，図５のような結果となった。

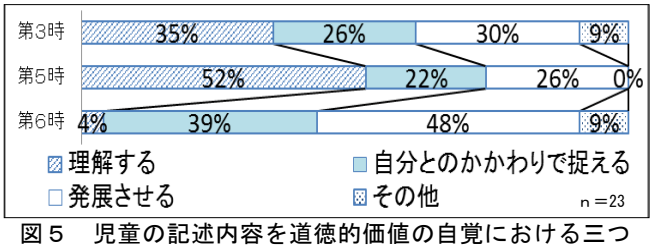


図５　児童の記述内容を道徳的価値の自覚における三つの事柄で分類した割合

第３時では，道徳的価値について発展的に考えることができた児童が 30%だったが，第６時では 48%と，数値が上昇していることが分かった。この結果や児童の様子から，道徳的価値の理解に留まらず，道徳的価値を自分なりに発展的に考えることができており，体験活動との関連を図り，道徳の時間を工夫したことは，道徳的価値の自覚を深める上で効果があったといえる。

しかし，第５時では，道徳的価値の理解はできているものの，発展的に考えることができた児童が 26%と第３，６時に比べて低く，自分のこととして捉えきれていないことが明らかになった。展開後段で自己との結び付きが十分ではなかったことが原因であると考える。体験活動のどの場面をどのように提示するか等を吟味する必要がある。

さらに，図５のグラフから，第３，６時にそれぞれ９％の児童が道徳的価値を含む具体的な文言の入っていない記述をしており，体験活動や日々の様子と道徳の時間での資料内容がつながっていないことが分かった。個の実態に応じたワークシートを準備したり，体験活動と資料のつながりに気付かせるよう個別に声かけをしたりする等の手立てが必要である。

## ３　「集団かかわりプログラム」は，集団の中での役割の自覚を高めるのに有効だったか

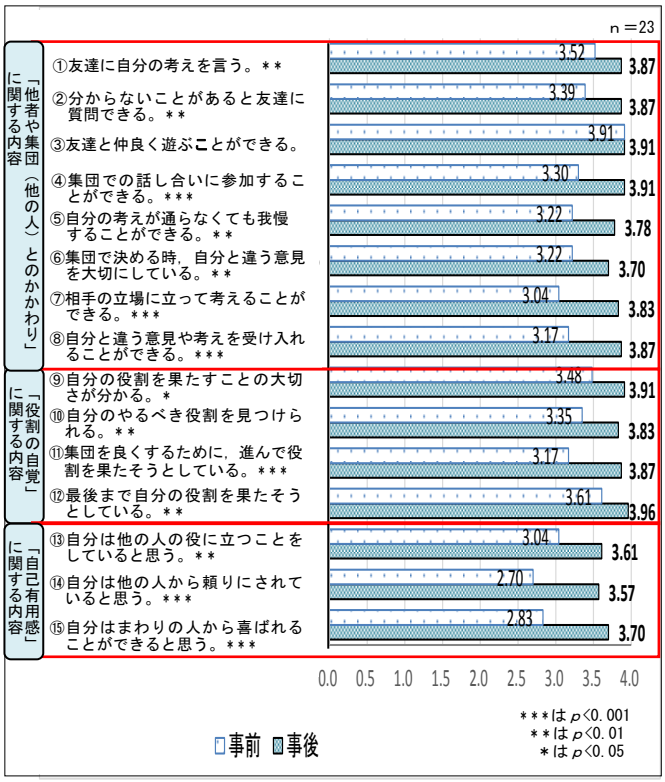


図６　プログラムの事前事後アンケート結果の比較

本プログラムの事前と事後に，「役割の自覚⑨～⑫」「自己有用感⑬～⑮」と共に，それらを高めるため，体験活動や道徳の時間の配列において基盤とした，「他者や集団（他の人）とのかかわり①～⑧」についてのアンケート調査を行ったところ，図６の結果になった。この結果を $t$ 検定にかけたところ，「③友達と仲良く遊ぶことができる」の項目以外は，全ての項目で有意な上昇が見られた。「役割の自覚」については，特に「集団を良くするために進んで役割を果たそうとしている」の項目において有意な上昇が見られた。自分のことだけでなく，集団全体のことを考えながら自分の役割について考えることができたといえる。「自己有用感」については，「他の人から頼りにされている」「周りの人から喜ばれることができると思う」の項目において有意な上昇が見られた。対象の異なる体験活動を意図的に設定したことで，自己有用感が高まったと考える。

「他者や集団（他の人）とのかかわり」についても，③以外の項目において有意に上昇している。また，プログラム最終時の振り返りにおいて，「思いやりや友情を大切にして，これからは相手の事を考えて行動しようと思った。また自分の決められた仕事を精一杯やる。」と記述をした児童がいた。このような，相手のことを思いやったり信頼したりしながら，役割の自覚を高めていったことが分かる記述

をした児童が39%いた。他者や集団とかかわらせる体験活動はもとより，「他の人とのかかわり」に関する２の視点を基盤としながら，道徳の時間の授業構成を行ったことは効果があり，「集団の中での役割の自覚」を高める上で有効であったといえる。

さらに，事前のアンケートで自己有用感の評定平均値が1.7と低かった児童Ａの変容を追った。プログラム前は，自分自身が人の役に立っていると感じることが少なく，自分の役割を進んで果たそうという姿もあまり見られなかった。しかし，プログラムを通して，自分から人とかかわろうとする姿が見られ，図７にもあるように，「野外活動の時は責任をもつようにする」と記述をする等，人の役に立つ喜びとともに，役割の意義を感じることができてきた。プログラムの最終時には，「人の役に立つ仕事がしたい」「最後までやりきりたい」と，役割の自覚を発展的に捉えることができ，事後のアンケートでは，全ての項目で評定平均値が４に伸びた。

**第１時（学級活動：低学年との活動に向けた話合い）**
２年生に楽しんでもらえるといいなと思った。ルールを教えて楽しくやってもらう。
**第２時（学級活動：低学年との体験活動）**
教えると，うなずきながら聞いてくれた。「分かっているんだな。」と思った。
**第３時（道徳の時間：思いやり）**
２年生との活動でも，５年生，２年生が最後にはどちらも笑顔ということが分かった。「相手のこと」は「２年生のため」で思いやりだった。
**第４時（学級活動：集団宿泊活動に向けての同学年での話合い）**
野外活動の時は責任をもつようにする。
**第５時（道徳の時間：友情・信頼）**
相手を思いやることが本当の友達ということがわかった。これから相手を思いやる人になりたい。
**第６時（道徳の時間：役割の自覚）**
私は人の役に立つ仕事をしたい。例えば，２年生との活動のように。そして，一人一人の役割を大切にして最後までやりきりたい。

**図７　児童Ａの毎時間の振り返りの内容**

これらのことから，本プログラムは，集団の中での役割の自覚を高めるのに有効だったといえる。

## Ⅵ　研究のまとめ

### １　研究の成果

道徳の時間と体験活動を関連させた「集団かかわりプログラム」を実践することで，児童の「人の役に立っている」という自己有用感を高め，それが原動力となり，集団全体のことを考えながら，自分の役割を果たそうとする意欲や集団の中での役割の自覚を高めることができた。

また，道徳の時間の展開後段において，体験活動の様子や振り返り等を視覚的に提示し，想起させたことで，道徳的価値を自分なりに発展させ，実現しようとする思いや願いをもたせることができた。

### ２　今後の課題

道徳の時間において，展開前段で扱った読み物資料の内容と，展開後段での体験活動の振り返りがつながらない授業場面があった。児童が道徳的価値を自分のこととして捉えられるように，展開後段における資料提示の手立てや方法，体験活動の内容の精選，個の実態に応じたワークシートの工夫・改善等が必要である。

また，集団における役割の自覚を高めるため，「集団かかわりプログラム」を全６時間で行ったが，「解説」第５学年及び第６学年の４－（３）に示されているように，「自分の役割を自覚し，協力して主体的に責任を果たす」という道徳的価値の自覚をさらに深めていく必要がある。そのため，第５，６学年の２年間を通した意図的，継続的な取組が必要であると考える。児童に自己有用感を味わわせ，体験活動と道徳の時間を効果的につなぎ，年間を通して意図的・計画的に位置付けられるよう，プログラム内容を開発していく必要がある。

**【引用文献】**


1)　文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社 p.60
2)　文部科学省（平成20年）：前掲書 p.60
3)　文部科学省（平成20年）：前掲書 p.93
4)　小寺正一・藤永芳純（2009）：『三訂　道徳教育を学ぶ人のために』世界思想社 p.171
5)　文部科学省（平成20年）：前掲書 p.72
6)　大分市教育委員会（平成20年）：『大分市教師用道徳指導資料集「小学校」編　魅力ある道徳授業の展開』 p.75


**【参考文献】**


道徳教育の充実に関する懇談会（平成25年）：『今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）』
堺正之（平成24年）：「社会参画への意欲や態度を形成する教育の視点」『初等教育資料３月号』東洋館出版社 p.12
文部科学省：『体験活動事例集』（平成15年）
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（平成23年）：『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』
押谷由夫（2013）：『道徳教育専門部会（第３回）資料５－１　委員提出資料』文部科学省
石原利樹（2003）：『社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ』広島県立教育センター
成田國英（1996）：『「生きる力」を育てる異年齢集団活動の展開』明治図書
鶴野尚美（2007）：『異年齢集団による活動を通し，自己有用感を高める第６学年特別活動』
埼玉県立総合教育センター（平成13年）：『児童生徒の社会性の育成に関する調査研究の概要』